

令和4年度 「みそのもくもく」学生の振り返り

(学びのねらいとしている保護者との関わりについて抜粋しました)

【5月～6月】

○男の子の保護者の方から、「この子、普段絵の具とかあんまり好きじゃないみたいなのですが、今日はなぜか繰り返し遊んでいるんですよ。」と声をかけられた。その男の子はとても笑顔だったので、「そうなんですね。お友達がたくさんいる環境で自然と体が動いているようですね。」と返答すると、保護者の方は「不思議ですね。楽しくて良かったです。」と笑顔だった。準備や運営は大変だったが、子どもや保護者の方が楽しいと思ってくれて良かった。

○大工さんコーナーを観察しているときに、保護者に方に「このおもちゃの対象年齢はいくつくらいですか？」と聞かれ、近くに保育アドバイザーの先生がいたので、聞いたところ、「指先を使うから3歳くらい」と教えてもらいました。保護者の方が聞いてくれたのに、中途半端な関わり方になってしまい、申し訳ないことをしたなあと感じました。保護者の方からの関わりは貴重だと思うので、話したら最後まで責任持って関わるようにしたいです。

【7月～9月】

○今回のもくもくは小麦粉粘土あそびでした。あそび始める前に「魔法をかけるね」と手に小麦粉をつけてもらうのが、子どもたちは嬉しい様子でした。魔法をかけるためにジップロックに小麦粉を入れて持って行くと、「これ小麦粉でしょ？自分でつけたい！」と言われたので、その思いを尊重し、「いいよ」と私が言うと、小麦粉を手いっぱいにつかみ、ギュッと握ると、少し固まることに気づき、何度も繰り返しました。すると、保護者の方が「家だと、小麦粉散らかってしまうから、ハラハラしちゃってこんなことできないです」と話し始め、子どもが経験できた喜びを伝えてくれて、嬉しかったです。そこから小麦粉粘土の話に発展し、作り方も教えることが出来て、「今度、やってみます！」と言ってくれて、子ども一つの行動から、保護者との会話がつながることを実感できました。

○今日の活動の終わりに、「アルヴェではどのようなことをするのですか？」と保護者の方から聞かれた。突然の質問に少し戸惑ってしまい、「まだ、考えているのですが、おもちゃを作ったりしますよ。」と答えてしまった。できるだけ次回の内容を把握しておくことが大切だと思い反省した。

【10月～12月】

○今日の活動は支援室内での制作活動だった。最初から最後まで支援室内での活動は初めてだった。体育館を使うと、開放感はあるが、「もくもく遊ぶ」という活動は難しいと思っていた。支援室内での活動は密集していたが、子どもが好きな遊びを見つけて、じっくりと取り組む姿や、親子で遊びを楽しんでいる様子があり、支援室内での活動の魅力を感じた。

○ままごとコーナーで、お子さんが箸を冷暖房の穴に落としてしまい、お母さんが申し訳なさそうにしていたので、「気にしなくて大丈夫ですよ！子どもたちもわざではないので仕方なかったことですよ！」と伝えると、少し安心した表情に変わってよかったです。その後も、薄い食材など落とさないように気にかけていた場面もあったので、環境設定の時にそういうこともあるかもしれないと予測して、配置するべきだったと思いました。

【1月～3月】

○ストロー飛行機制作にて……

Aちゃんは制作したもので繰り返し遊んでいるうちに、自分のおもちゃがまっすぐに飛ばないことに気づき、ストローをまっすぐに貼り直したりと工夫をしていた。保護者の方にAちゃんの様子を伝えると、「本当に研究熱心な子なんです」と教えてくれた。それに対し、「Aちゃんはどんな遊びをするときも考えながら遊んでいますよね」と答え、家庭でも作れるようにと思い大きさの違うストローを渡した。Aちゃんも保護者の方も喜んでくれた。

今回は子どもの様子をお母さんに伝えるということを意識した。伝えるときは少し緊張したが、子どもの様子伝えると保護者の方はとても嬉しそうにしていた。こういったことの積み重ねが信頼関係や安心になり、子育て支援にもなっていくんだと実感できた。

○子どもたちと関わっていると、保護者から声をかけてくれる機会も以前より増えたと感じた。それは、毎回の短い時間で子どもたちが満足感を得ているからこそだと思った。もくもくでの保護者と子どもとの貴重な時間に携わることができて改めてよかったと感じた。